

1	公開授業実施日時	2018年11月12日（月）15:30～16:20
2	場所	京都教育大学附属高校 LL教室
3	対象	2年 理系クラス 37名
4	授業者	佐古 孝義
5	島名	グローバル・エシックス
6	単元名	『MAINSTREAM English Communication II Second Edition（検定教科書）』Chapter 7 Animal Intelligence 動物の権利について－動物実験の是非を問う－
7	関連する教科・領域	英語科・公民科（倫理）
8	単元の目標・ねらい	<p>〈言語（英語）材料としての学習目標〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・強調のdo / did, &lt;省略&gt;, &lt;動名詞の意味上の主語&gt;について, それぞれの意味や働き, 形を理解する</li> <li>・接尾辞 -y, -ish, -like や接頭辞mis- の意味を理解し, それを含んだ単語の意味を推測する</li> </ul> <p>〈内容面の理解の目標〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「知性」とは何かについて考え直す</li> <li>・さまざまな哲学者の動物に対する考え方の差異を知る</li> <li>・動物実験の方法とその問題点について知る</li> <li>・人間と動物を区別するものとは何かについて再考する</li> </ul>
9	グローバル・スタディーズとしての目標・ねらい	<p>動物倫理(Animal Ethics)とは、人と動物との関係が本来どのようにあるべきか、また動物とは本来いかなる存在であるかといった問いについて、哲学的・倫理的に考究するものであるとされる。動物は、人間の言語体系や行動様式とは異なる動物本来の生を保ちながら、人間との関係性の中で生きている。欧米ではすでに、動物に対する扱いについて、Animal WelfareやAnimal Rightsといった立場を巡って議論が蓄積されてきた。一方、現代の日本においても、野生動物による農業被害の問題、ペットの殺処分、災害時における動物の扱い、捕鯨問題など日本社会に生きる我々の動物に対するあり方が、グローバルな場面でも問われることが増えてきており、日本の将来にも関わる重要な課題となっている。今回は、動物実験の是非について（もちろん高校生（及び教員も）直接の当事者ではないが）その恩恵を医療や美容、食など様々に受ける「消費者」として、改めて正面から考えてみることで、グローバル時代を生きる「エシカルでクリティカルな賢い消費者」となるために必要なことは何かを問う。</p>
10	単元の評価規準【教科・領域として】	<p>1) ディベートの評価</p> <p>役割別にワークシートの記入度合いによって、ディベートへの参加姿勢を評価する。また、ディベート中の発話に関しては、英語でのコミュニケーション活動、特に自分の考えを伝えることを重視するので、内容面を重視し、軽微な綴りや文法的な誤りに対してはマイナス評価をしない。</p> <p>2) ライティング課題</p> <p>作文について、英語としての表現面に関しては、ディベート中の発話よりも文法的・語法的な誤りを厳しめにチェックし、訂正する。専門的な語彙はすでに教科書以外の文献読解で学習されているため、それを正しく作文中で用いることができるかも評価対象とする。</p>

11	単元の評価規準【グローバル・スタディーズとして】	動物実験に対する当初の自分の意見が、ディベート活動を経て変わったとすれば、何がその決め手になったのか。また変わらなかった場合は、どういう点で自分の意見をより確かなものと感じるようになったかを意識させる。当然であるが、賛否そのものを評価するのではなく、賛否双方の意見対立に関して、どこまでクリティカル・シンキングの手法を用いて原理的に批判的に考えることができたか、ということの評価の対象とする。
12	単元計画	第1時～第4時：教科書の読解 第5, 6時：文献を通じた発展的な理解 -賛成・反対の議論を組み立てる -チーム分けを行う -英語ディベートで用いる表現を学習する 第7時：英語によるディベートを実施する
13	本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●外国語表現の能力 <ul style="list-style-type: none"> <li>・自らの意見を分かりやすい英語で論理的に表現し,ジャッジを説得することができる。</li> <li>・相手の意見と自分の意見を即座に比較・分析し,論理的に反駁ができる。</li> <li>・相手の質問内容に沿った回答ができる。</li> </ul> </li> <li>●言語・文化についての知識・理解 <ul style="list-style-type: none"> <li>動物実験の是非に関して, 「動物の権利」を擁護する観点と「動物福祉」を掲げる観点の双方の論点を社会的・科学的な視点をもって理解し,客観的に分析することができる。</li> </ul> </li> </ul>
14	本時の展開	≪別紙指導案を参照≫
15	グローバル・スタディーズとしての特徴	動物実験の是非についてディベートを行うことで、生徒が問題にする主な争点は、「動物実験の実施によって人間が受ける恩恵」と「動物を搾取したり痛みを与えたりする残酷さ」とのバランスをどう考えるか、という問題である。「利益か倫理か」という二項対立と単純化してはいけなくもかもしれないが、容易に結論が出せる問題でもないし、綺麗事だけで済む問題でもないということを生徒は再認識する。実際、ある生徒は「動物実験を全否定する論理を組み立てることは現状を考えると非常に難しい」と作戦会議中にこぼした。「科学(医学)の進歩」という美名の下で、動物の犠牲によって得られる恩恵を医療や美容、食など様々な面で受ける「消費者」であるわれわれが、改めて正面からこの問題を考えてみることは、「エシカルでクリティカルな賢い消費者」となるために正に必要なことではないかと考えさせられる授業内容出ることが特徴である。
16	授業者から一言	リーディングのテキストの平面的な理解から一歩進めて、他教科の学習内容を援用したり、自分でリサーチしたり、その他の読解素材に当たらせたり、自分で実際に試してみたり、そして何より自分が感じたことや考えたことを仲間と共有させる、という立体的な学習を試みることが、こうした倫理的な問題を使う際には特に重要だ大切だと考えさせられた。

## 外国語科 学習指導案

学校名 京都教育大学附属高等学校

指導者名 佐古 孝義

1 対象 第2学年 37名

2 日時 平成30年11月12日(月) 第7校時(15:30-16:20)

3 場所 図書室 (本校メディア棟2階)

### 4 題材名

MAINSTREAM English Communication II Second Edition (検定教科書)

Chapter 7 Animal Intelligence

動物の権利について—動物実験の是非を問う—

### 5 題材について

教科書では

- ① 「ヒトとサルはどちらがより賢いか」という問い
- ② アリストテレスの「自然の階段」という考えと、ルネ・デカルトやB・F・スキナーの動物に対する考えについて
- ③ ゾウに関する従来の実験の問題点と現在の実験の方法について
- ④ 現在の科学者がヒトと動物を区別する壁を崩しつつあることについて  
が取り扱われている。

教科書の読解・聴解を通じて、まずこうした論点に対して基本的な知識を得た上で、とくに③④の論点を発展させ、以下の文献などでさらに知識を整理・拡充する。

#### 【基本文献】

- 『科学技術をよく考える -クリティカルシンキング練習帳-』名古屋大学出版会 (2013)  
ユニット9「動物実験の是非」pp.230-241
- *Pros and Cons: A Debaters Handbook* Routledge(2013)
  - Animal Rights pp.13-14
  - The banning of animal experimentation and vivisection pp.115-116
  - The abolition of zoos pp.208-209

これらの文献では、さまざまな立場から「動物の権利」についての賛否両論の議論がされている。動物の権利運動は、その対象が狩猟、皮革製品への利用、動物園などでの展示消費、動物実験や工場畜産と呼ばれる集団的な畜産の手法などへの批判として展開されているが、(日本では捕鯨などの問題もある)こうした問題について、CT(クリティカル・シンキング)の手法を用いて原理的に批判的に考えることは、「エシカルでクリティカルな賢い消費者」となるうえで非常に有益である。

【参考文献】 その他

- 伊勢田哲治, なつたか『マンガで学ぶ動物倫理』 化学同人(2015)
- *Philosophy for Teens —Questioning Life’s big ideas—*(Prufurock Press 2007)  
Chapter 10 Do Animals Have Rights? pp.89-98 など

## 6 題材の目標・ねらい

検定教科書に関して

### 〈言語（英語）材料としての学習目標〉

- 強調の do / did, <省略>, <動名詞の意味上の主語>について, それぞれの意味や働き, 形を理解する
- 接尾辞 -y, -ish, -like や接頭辞 mis- の意味を理解し, それを含んだ単語の意味を推測する

### 〈内容面の理解の目標〉

- 「知性」とは何かについて考え直す
- さまざまな哲学者の動物に対する考え方の差異を知る
- 動物実験の方法とその問題点について知る
- 人間と動物を区別するものとは何かについて再考する

その他の教材からは, 動物実験の是非に関して, 「動物の権利」を擁護する観点と「動物福祉」を掲げる観点の双方の論点を整理し, 倫理的な論件について CT を実践する。

### 〈グローバル・スタディーズとしてのねらい〉

動物倫理(Animal Ethics)とは、人と動物との関係が本来どのようにあるべきか、また動物とは本来いかなる存在であるかといった問いについて、哲学的・倫理的に考究するものであるとされる。動物は、人間の言語体系や行動様式とは異なる動物本来の生を保ちながら、人間との関係性の中で生きている。欧米ではすでに、動物に対する扱いについて、Animal Welfare や Animal Rights といった立場を巡って議論が蓄積されてきた。一方、現代の日本においても、野生動物による農業被害の問題、ペットの殺処分、災害時における動物の扱い、捕鯨問題など日本社会に生きる我々の動物に対するあり方が、グローバルな場面でも問われることが増えてきており、日本の将来にも関わる重要な課題となっている。今回は、動物実験の是非について（もちろん高校生（及び教員も）直接の当事者ではないが）その恩恵を医療や美容、食など様々に受ける「消費者」として、改めて正面から考えてみることで、グローバル時代を生きる「エシカルでクリティカルな賢い消費者」となるために必要なことは何かを問う。

## 7 指導計画（全7時間）

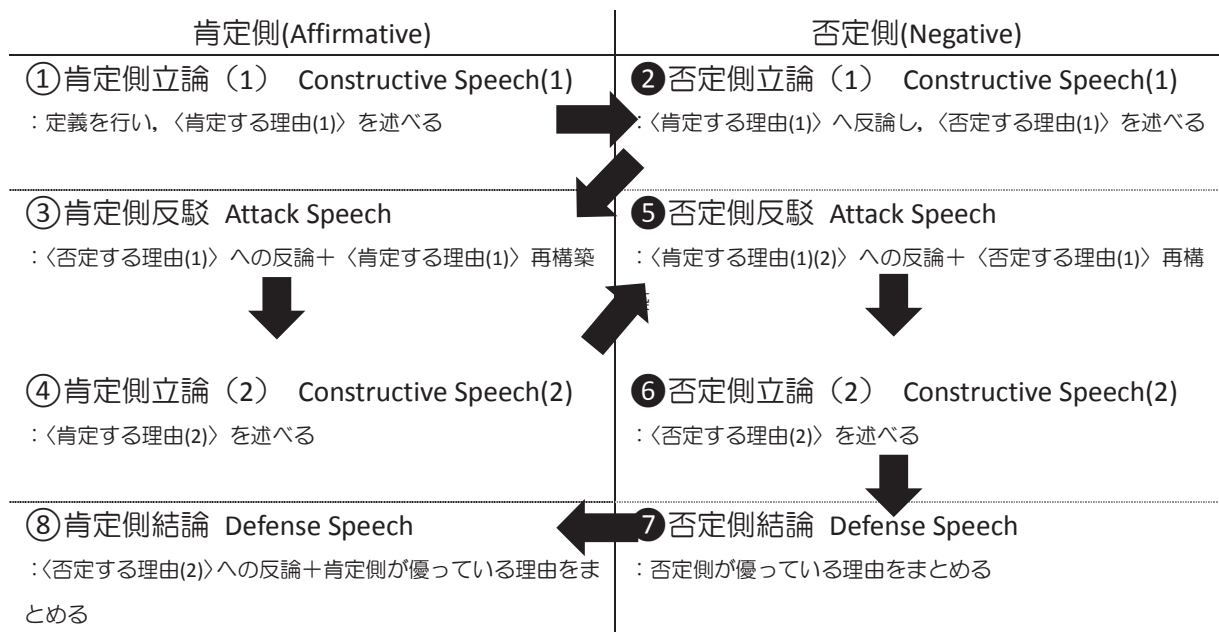
時	学習活動	評価基準（評価の観点）
1-4	教科書の読解	●関心・意欲・態度 本文を読み、ヒトと動物を隔てる壁を崩し続けている研究者たちについて考えようと努めている。

		<ul style="list-style-type: none"> <li>●英語の技能面での評価</li> <li>●Speaking: 本文の内容についての英問英答や、知りえた情報の英語による説明ができる。</li> <li>●Writing: 本課の内容についての英問に対して英語で答えを書くことや、知りえた情報を英語に直して書くことができる。強調の do, did, 省略, 動名詞の意味上の主語など, 本文中に出てきた語法・表現を使って, 指示にそった適切な英文で書くことができる。</li> <li>●Listening: 本課の内容についての英問や英文を聴いて, 内容を正しく理解できる。</li> <li>●Reading: 動物の知能について, 従来の考えや最近明らかになってきたことを読解により理解できる。</li> <li>●知識・理解 強調の do, did, 省略, 動名詞の意味上の主語について, それぞれの意味や働き, 形を理解している。 接尾辞 -y, -ish, -like や接頭辞 mis- の意味を理解し, それを含んだ単語の意味を推測できる。</li> </ul>
5, 6	<p>文献を通じた発展的な理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●賛成・反対の議論を組み立てる</li> <li>●チームわけを行う</li> <li>●英語ディベートで用いる表現を学習する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●知識・理解 動物実験の是非に関して, 「動物の権利」を擁護する観点と「動物福祉」を掲げる観点の双方の論点を整理する。</li> <li>●関心・意欲・態度 倫理的な論件について, 可能な限り先入見を捨てて公平な視点でものを見ることができる</li> </ul>
7 (本時)	英語によるディベートを実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●コミュニケーションへの関心・意欲・態度 積極的にディベートに参加している。 チームの中での自分の役割を理解し, 説得力のある議論を展開するためにチームに貢献している。</li> <li>●外国語理解の能力 発言者の発言内容を正確に理解できる。 自分の理解度を即座に判断し, 理解の不十分な内容には質問ができる。</li> <li>●外国語表現の能力 自らの意見を分かりやすい英語で論理的に表現し, ジャッジを説得することができる。 相手の意見と自分の意見を即座に比較・分析し, 論理的に反駁ができる。 相手の質問内容に沿った回答ができる。</li> <li>●言語・文化についての知識・理解 動物実験の是非に関して, 「動物の権利」を擁護する観点と「動物福祉」を掲げる観点の双方の論点を社会的・科学的な視点をもって理解し, 客観的に分析することができる。</li> </ul>

〈注記〉今回行うディベートの形式に関して

本来のパラメンタリー（即興型）ディベートは、ポリシー／アカデミックディベートとは異なり、特段の事前準備を必要としないものとされている。授業の冒頭に論題が与えられ、15分の準備時間を経てディベートを行う。ただし、今回は教科書で学習した内容を発展させた Post-reading の活動であり、また論題が非常に倫理的で難度の高いものである点から、日本語／英語での参考文献での参考資料の読解と論点整理の時間を設けた。

ディベーターの人数構成についても、本来であれば肯定側・否定側ともに3人ずつの6人、各グループには一般聴衆であるジャッジが1人ないし2人加わる形式が一般的であるが、授業実施クラス的人数が37名であるため、以下の通り肯定側・否定側ともに4人ずつの8人＋ジャッジが1人または2人とし、計4グループ（8チーム）で実施する。スピーチの順番は①～⑧の通りで行う。



相手チームのスピーチ中に、質問やコメントを15秒以内で発言することができる。これをPOI (Point of Information)と呼ぶ。生徒には積極的にPOIをするように促す。

## 8 本時の展開 (7/7)

過程	指導内容	学習活動	指導上の留意点
導入 15分	論点整理と作戦会議	「動物実験の禁止」について論点を整理する。 チームの中での役割分担を確認し、作戦会議を行う。	前時までの復習をし、語彙や概念などを確認する

展 開  23 分	ディベート を実施する (18分)	Parliamentary Debate という形式で行う 4人一組×8チーム+審判員(judge) Motion: Animal experimentation should be banned. 「動物実験は禁止すべきだ」		生徒には積極的に POIをするように促 す： 相手チームのスピー ーチで分からなか った点を質問す る。単純に、声が 小さくて聞き取れ なかったのもう 一回行ってほしい とか、そういうる 根拠は？と問うこ とで、Argumentの 論理性を確かめる ことができる。  各スピーカーの役 割： <Constructive Speech> 肯定側は、その政 策を採用すること でどのような Advantageがあるの かを1人1つ、合 計2つ提示する 否定側は、その政 策を採用すること でどのような Disadvantage(悪影 響)があるのかを1 人1つ、合計2つ 提示する  <Attack Speech> 相手チームが出し た Advantage / Disadvantage に対 して反論する  <Defense Speech> 相手チームが、自 分たちの出した Advantage / Disadvantage に対 して行った反論に	
			Affirmative Side (肯定側)		Negative Side (否定側)
		3分	① Constructive Speech(1) : 定義を行い、〈肯定する理由 (1)〉を述べる		
		3分			② Constructive Speech(1) : 〈肯定する理由(1)〉へ反論し、 〈否定する理由(1)〉を述べる
		2分	③ Attack Speech : 〈否定する理由(1)〉への反論+ 〈肯定する理由(1)〉再構築		
		2分	④ Constructive Speech(2) : 〈肯定する理由(2)〉を述べる		
		2分			⑤ Attack Speech : 〈肯定する理由(1)(2)〉への反論+ 〈否定する理由(1)〉再構築
		2分			⑥ Constructive Speech(2) : 〈否定する理由(2)〉を述べる
		2分			⑦ Defense Speech : 否定側が優っている理由をまと める
		2分	⑧ Defense Speech : 〈否定する理由(2)〉への反論+ 肯定側が優っている理由をまと める		
1分	終了後は握手して互いの健闘を称える				
2分	Judge(審判員)による判定  講評・Best Debaterを決める ・ジャッジのポイントは、CTを実践できているかどうか Argument【議論】= Claim【主張】+ Support【根拠】 (Support【根拠】= Reasoning【論証】+ Evidence【証拠】) ・Evidenceは具体例など、相手を説得できるようなものを効果的に使えているか				
2分	教員からの簡単なフィードバック				

			ついて、立て直し（再反論）を行う。
ま と め  12 分	ライティング活動	チームの立場とは関係なく、自分で賛成／反対の立場を選び、Essay Writingを行う。 資料はチームで共有する。 (書ききれなかった生徒は家で完成させる)	・当初の自分の意見が、ディベート活動を経て変わった場合、何がその決め手になったのかを議論させる

## 9 評価

### 1) ディベートの評価

上掲のディベート進行表にある通り、すべての生徒に何らかの役割が与えられ、役割別にワークシートが配布される。そのワークシートの記入度合いによって、ディベートへの参加姿勢を評価する。また、ディベート中の発話に関しては、英語でのコミュニケーション活動、特に自分の考えを伝えることを重視するので、内容面を重視し、軽微な綴りや文法的な誤りに対してはマイナス評価をしない。

### 2) ライティング課題

作文について、英語としての表現面に関しては、ディベート中の発話よりも文法的・語法的な誤りを厳しめにチェックし、訂正する。専門的な語彙はすでに教科書以外の文献読解で学習されているため、それを正しく作文中で用いることができるかも評価対象とする。内容面の評価は3)に譲る。

### 3) グローバル・スタディーズとしての評価

動物実験に対する当初の自分の意見が、ディベート活動を経て変わったとすれば、何がその決め手になったのか。また変わらなかった場合は、どう言う点で自分の意見をより確かなものと感じるようになったかを意識させる。当然であるが、賛否そのものを評価するのではなく、賛否双方の意見対立に関して、どこまでCTの手法を用いて原理的に批判的に考えることができたか、ということの評価の対象とする。